使命 24)。

このように聖霊は、洗礼と堅信の秘跡をはじめとして、さまざまな形で一人ひとりに豊かな恵みを注がれ、さまざまな種類の奉仕へと招かれるのである。そしてその奉仕には、「思いのままに吹く」聖霊にふさわしくさまざまな形が生まれてくる。世界の隅々に広がって生きるキリスト者は、それぞれに与えられたカリスマに応じて、千差万別、無数の奉仕を展開するのである。

**b. 信徒奉仕職とはなにか**

今日、信徒が教会の使命を担って働くことの必要性は大いに高まり、「何もしないでいることは、誰にも許されません」(信徒の召命と使命 3)とまで明言されている。しかし、信徒奉仕職とは何か、あるいは、どのような働きが信徒奉仕職とみなされるのか、という具体的な規定になると、なかなか明確にされていないところがある。定説が確立しているとは言いがたく、『信徒の召命と使命』においても、奉仕職、任務、役割の語が並列して用いられ、「シノドスに集まった司教たちは、正確な用語の必要性を主張しました」(23)と述べるにとどまっている。

奉仕職の原型を示すものとして、聖書の次のような箇所がしばしば引用される。

「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです」(1コリント 12･28)。

このような奉仕職は教会の誕生期において成立したものであるが、今日の複雑化した社会における信徒奉仕職を考えるとき、「最初から、どのような、そしていくつくらいの信徒の奉仕職が制定されるべきかを言うことはできない。それは時と所によるものである。奉仕職は、特定の共同体の中で、その成長過程の中での必要性に応じて、しだいにあらわれてくるものである」(教会奉仕職に関するアジア会議結論 57)と述べられる一方、1987年に開催された信徒の召命と使命に関するシノドスでは、「『奉仕職』という言葉の無差別な使用」について批判が寄せられた、とも記されている(信徒の召命と使命 23)。

さらにレオナルド・ドゥーハンは、その著書で、「信徒の奉仕職という言葉はあいまいで、少なくとも三つの意味にとることができます」(信徒を中心とした教会 P79)としてかなり広い意味でこの言葉をとらえているが、信徒奉仕職という言葉を的確に捕らえようとするとき、一般的にはいくつかの条件をもとにある程度限定された意味で使われている。

そこでここでは、信徒奉仕職を規定すると考えられるいくつかの要素をもとに、その輪郭を描き出すよう試みることとする。

**＊　奉仕と奉仕職　－継続的な奉仕としての奉仕職**

奉仕職と呼びうるものは、職務の形態をとり、同じ役割を常時継続しておこなうものである。すなわち、「教会のメンバーが一定の期間それを引き受け、広い範囲で実行」し、「人々にキリストの救いの現存を示す教会の責任に、公に参加する」(教会奉仕職に関するアジア会議結論 32)ものであり、「安定性、継続性、そして責任を持って実行」(同上 55)することが条件とされる。

これに対し、「2．1)教会の使命としての使徒職」でも述べたように、キリスト信者すべてに求められ、かつ必要に応じその時々に自発的に行われる奉仕も考えられる。このような活動は、アジア司教会議連合(FABC)編『教会奉仕職に関するアジア会議結論』においては、単に「奉仕」と呼ばれ、「奉仕職」とは区別されている。また、レオナルド・ドゥーハンは、この「奉仕」を洗礼のときすべての人に与えられる務めと理解し、「キリスト者